

緊急消防援助隊広域活動拠点に関する検討会（第3回）議事要旨

1 検討会の概要

- (1) 日 時：平成24年12月20日（月）10:00～12:00
- (2) 場 所：あすか会議室、ダイヤ八重洲ビル3階303号室A
- (3) 出席者
 - 小林座長 （東京理科大学大学院国際火災科学研究科教授）
 - 重川委員 （富士常葉大学大学院環境防災研究科教授）
 - 五十嵐委員 （東京消防庁航空隊長）
 - 川北委員 （四日市市消防本部消防長）
 - 高橋委員 （宮城県総務部消防課長）
 - 永江委員 （静岡県危機管理部消防保安課長） 欠席

2 概要

冒頭、座長の挨拶及び議事進行により検討会を開催した。
委員からの提供資料及び事務局からの会議資料の説明を行った。

【各委員の主な意見】

(1) 緊急消防援助隊の自己完結的な後方支援のあり方

- 別紙3のアンケート調査、全消防本部を対象にしたものか。
いろいろな準備の具合は消防本部の規模により違うと思うが、規模の差と回答との関係についての傾向と、消防の広域化が言われており、静岡県は東・中・西になるとの検討結果が公開されているが、広域化の有無とスケジュール的なことと緊急消防援助隊との関係があれば教えてほしい。
- 資料1の2(2)、交付金要綱の改正をさらに詳しく説明してほしい。
今回我々が一番困ったのは、各市町の混合編成であるため、現地で燃料や食料調達を行うが、現金を持っていけない。個人の金になってしまい、(その後の)対応ができなかった。県にも、一括して何とかしてほしい、自衛隊のように会計部隊という形でつけてほしいと要望したが、県も会計規則もあり建て替えができない。こういう制度ができると、県がまとめてバスをチャーターするとか燃料を買うことが可能になると思う。

(2) 緊急消防援助隊広域活動拠点の機能

- 実際に大規模な津波被害等になると、県内だけで民間等の協定を結んでいても、燃料の提供等は現実にできなかった。宮城県だけでなく、今後想定される災害の場合、太平洋側の都府県は日本海側の府県と協定を結んでおいて、燃料やホース、ホースも地元では調達が無理だったから、ボンベも内陸は家屋が倒壊し、沿岸はすべてが流されているため、山形県や新潟県に頼らざるを得なかった。それも、道路が寸断されたとかでうまくいかなかった。それらのことも念頭に置いてもらいたい。
- 県内で考えるか、隣接県で考えるか、隣接地方で考えるか、今回の3.11を経験して強く思ったのは、東北がだめなら関東が全部やるというくらいのスパンで考えないと難しい

くなる。阪神淡路級であれば隣接県などでもかなり対応できたかと思うが、その辺は考え方をもう少し大きく持った方がいい。

時間軸についてはいい表ができたと思う。この第2段階あたりから除染、デコンタミネーションという考え方が日本は欠落していると思う。

ニュージーランドでの経験では、エリアすべての除染と隊員に対する除染活動、精神的にもすごくいい。安心して活動に当たれる。夏場では（遺体の）痛みが激しい状況下での活動なので、その時の除染活動も入れる必要が今後出てくると思う。

○ 除染というと放射性物質だとか考えるがこの点はどうか。

○ 当然劇毒物もあるし放射能もあるが、遺体の体液が付着したり、腐臭がひどい。ニュージーランドでは活動時に除染キットを隊員に渡す。ミントの香りでまぎらわすとかビックスのようなものも配られる。不織布性のつなぎ衣類や手袋、汚染物の収納袋などが各個に朝渡される。

キャンプサイトに入る際には、消毒を済ませてないと入れない、というシステムもある。キャンプサイトエリアを完全に区画する。活動に出る際は、簡易除染をし、帰ってくるとそれらをすべて外部におかされる。そのような心身共に除染効果とか汚染を拡大させないという思想がある。3.11では冬だったので問題にはならなかったが、夏季だったら相当苦労したと思う。

隊員のメンタルの面でも、感染対策や臭い、手への付着物などが大変大きい。そのような考えもぜひ取り込んでほしい。

○ 東北地方は寒い時期だが、それでも数か月後には、ハエ、普通のイエバエでなくギンバエとか、カも発生した。急きょプロジェクトチームを関東から招いて、殺虫作業に入ってもらった。仮設住宅もハエだらけだった。

隣接県、太平洋側と日本海側、民間部門で資源を有するところは、大規模になればなるほど隣接県よりも国内ブロック単位で協定を結ぶというようなほうがいいかと思う。

(3) 緊急消防援助隊広域活動拠点の整備手法

○ この項目については、資料3及び4の説明による考え方に基づき次の標準モデルができてくるものと思われる。

(4) 緊急消防援助隊広域活動拠点の標準モデル

○ 資料4の中ごろに、今回の拠点と言っているもののイメージだが、「部隊の滞在・宿営及び後方支援活動の中核となる場所」と書いてあるが、中核となるというのは、例えば福島県の消防学校に少し時間がたってから、いろいろな隊が入ってこういった使われ方をしたが、これとは別にもっと最前線でたくさんの隊が現場で活動していて、それぞれの場でベースをもっていると、この中核というのはもっと最前線のベースとなっているようなところに対する支援なのか、あるいはみんなこの中核基地に、ここが拠点となってここからみんなが出ていくというイメージなのか、どちらなのか、両方なのか。災害の規模や被災地の広さにも関係すると思うが整理する必要があると思われる。

○ ここに書かれているようないろんな環境が整った拠点というのはありがたいが、ここに寝泊まりして活動する部隊もあれば、最前線で活動するベースもあり得ると思うがどうか。

ここに対する後方支援、資機材等はここから出そうと。この役割として両方あり得るという理解でいいのか。

○ こういう機能は全部わかる。上手に整理された。時間軸もきれいにされている。しかし今の質問のように、実際のもとのところと、いわゆる中核、最前線、どういう流れになっているか。拠点がどういうふうに流れていくのか、その辺の整理がこれからだと思いが、それを整理しないと、この機能ばかり載せても、1から10までであるが、軽重がかなりある。本当の広域活動というか、本当のベースになるところと、中間のベースになるところ、

当然機能が変わってくる。

時間軸によっても変わってくる。その辺の整理が非常に難しいと思うが、それを整理しておかないと、何でもやれということではないと思う。

これは、これから広域活動拠点を整備するための指針としてまとめていくということなので、その辺をもう少し（整理）しないといけないと思う。

今は機能を全部出しているのだから、これはこれでいいと思うが、そこの整理をしてもらうともう少しわかりやすいと思う。

○ 前から各委員が言っているのはそういうことだと思う。

大きな災害と、それほどでもないが緊急消防援助隊が出るということとで、この間のようなのと多分違うと思う。その辺も書き分ける、例えばレベル1とかレベル2とか、今回の出動はレベル1だとか言うのと、とりあえずのものを持って行って、3~4日でさっと帰ると。これは大変だということになるとレベル2だとか、レベル3になっていくとか、そのようなことも考えないと具合が悪いかもしれない。

大きなものになると、ベースキャンプのようなものがないととても奥地まで行きつけないとかいうので。前から言っているのは、一般論で書くのはなかなか難しいので、例えば静岡とか、三連動の地震などを考えると、静岡市まで陸上部隊はいつ行けるのかということを見ると、なかなか難しい。御殿場まではいけるかもしれないが、静岡まで行くのは大変だと。そうするとベースキャンプはどうなっていくのかという話になってくる。

先ほど日本海側との連携の話もあったが、静岡のことを考えると、日本海側との連携はなくて両脇しか行けないとか、その代わり海があると、そういったことも含めて大きな災害の場合をもうちょっと具体的に考えていった方がいいかなという気がする。

この表が非常によくできているので、もう一息だと思う。

○ その辺がもうちょっとかなという気がするが非常に難しいと思う。ケースばかり作っても逆に指針にならないし、今静岡県が計画しているように東と西との拠点で、両方から入るのをやって、そこが司令塔で後から次の中核となるところへ達する。前線基地は別にあるわけだから。当然その機能と真ん中の機能と違うわけだから、それは機能別に検討して、整備しているというのがあるのではないか。

それは一つの例だが、南北に長いとか地形の問題とか交通機関、海上のアクセスもあれば空港からしかない場合もあれば陸上しかない場合もある。そういったものを考えた中での指針にまとめていかないと、全国一律にはならないと思う。

- 資料4は、事務局の考え方だが、一つの例をやってケーススタディでやりきってしまったって、とりあえずそれを出して、それを一般化するのは次の段階だという方法だってないことはない。
- 基本的な考え方はこれでいいと思うが、いくつか補足は必要だろうが、これを各県にどのような作りようを、何か所とか、南北なのか、高速道路の入り口なのか、それぞれの県が抱える現状を踏まえて、何か所作ろうという指針も含めればいいと思う。

さっきの自衛隊の資料にある、完全にリエントリーする場としての拠点に使えばいい。今まで消防庁が示した各県の進出拠点、活動拠点はできているから、ここをベースキャンプにして次の、これを大としたら次の中規模のキャンプ、それから最前線の小規模のキャンプというような形にして、我々は順次働くわけ。小さい拠点がいらなくなれば中程度の拠点で働く、それが最終的にいらなくなれば一番大きい拠点に戻ってくる、それが多分時間軸になっていくと思う。

そういう示し方を、これをベースに作れば組立っていくのかな、これは非常にいいことだと思う。ただこれをどういうふうに各県が持とう、さらに中規模の拠点をこういうふうに作ろう、最前線（の拠点）はこう、というような作りにおけば、緊急消防援助隊で、災害の大きい小さいはあるだろうが、その時にパターンをそこから選べると思う。

(5) 緊急消防援助隊広域活動拠点の実現可能性の検証

- 実現可能性の検証というのは、今年度内にやっしまおうということか。
いろいろな考え方があってそれを検証して、プラン、ドゥ、シーのような感じで、また戻ると。一般的な考え方を先に作って、これを検証してみて、もう一回戻って、一般的な方に戻して、というようなことを年度内にやっしまおうということか。なかなか大変だ。
整備手法だとか標準モデルだとかというのはこのくらいの厚さだが、その下にずいぶん検討されているので、ある程度イメージは固まってきているのではないかと思うが、事務局では…。それをベースにして資料6を、検証をやってみて、ある程度固まってきている一般的な考え方を直していこうということだと理解していいのか。そうであればいいと思うが。
- 年度内というのを聞いてイメージしたのは、宮城県も対象となっているが、年度内にシミュレーションまでやって、報告書の形で全国に示すと。そうすると、先ほど中核という、今ある現有の場所、ベースキャンプ、あるいはアンケートに出たが公的な施設、屋根のあるところで寝泊まりすることができたので、体力もさほど消耗することなくてよかったというアンケート結果にもあるように、学校とか公的な施設のようなのがベースキャンプ、それよりも手前の大きな、中核的というような、というイメージか。シミュレーションする際の予測とか検証についてはどうか。

- まだちょっとシミュレーションのイメージがわからなかったが、具体的に検証で広域活動拠点として必要な、または推奨される機能が提供される可能性の検証、とあるが、最終的にシミュレーションで何が出てくるイメージか。例えば静岡なり三重なり宮城で、こういう条件で活動するとしたときに、必要なものが数式で出てくる、そのときにそれで何が出てくるのか、

そのあとはどうなるのか。

具体的に、宿営地の広さとか水の量とか、そういうことか。

- 宮城県でいえば、一時期全国から1か所に20機のヘリが来た。グランディという県の総合体育施設があって、その駐車場が一時ヘリ到着場になったが、それも手いっぱい、そこにどのように燃料を供給するかというのが問題になった。そのほかに自衛隊は、各高校のグラウンドを使ったりする。

こういう大きな（災害の）場合、学校教育は完全に機能停止。それを覚悟して校庭を使ってもらい、そのうちに2日目あたりからDMATが来る。そういうこともシミュレーションして、そこにどれだけの規模のヘリ、航空隊の応援をしてもらうか、そのために必要なソフト面をどのように整備するかというシミュレーションをすることによって、実際宮城県では1週間かかったが、こういうことをすれば3日、4日くらいで終わるのではないかという、そういうシミュレーションが出ると思っている。

想定を超えたもので、受援側もアンケートにあるように民間からもお叱りを受けたし、協定は何だったんだというようなお叱りを先方から受けたのも事実。

そんなことのないようにするための一つのシミュレーションということで、イメージしている。

- そのやり方はいいと思うが、多分ものすごく手間がかかって時間もかかりそうなのに、本当に年度内に終わるのかなというところが心配。しかも3つやろうとしている。できるのかなという…。

ただやればいいというのではなく、フィードバックして、もともとの考え方はこうだがやってみたら多分うまくいかないところがたくさんあって、こっちへ戻らないといけないはず。そこまでやって3月でできるのかなというところが非常に心配。本当にできるのかと。

やり方というのは当然のやり方だと思うが、一般化して基準のようなものにして出そうとして、3月に本当にできるのかなというところが、非常に心配である。

- 一般化して基準として出すというのは、自治体として非常に重要なことであるが、それに縛られてしまうとやり難いのではないか。

- 報告書でここまでやって、一般化するのをもう少し先にするとか、3ついっぱいやらないでとりあえず1個やってみてとか、途中までの報告書でも、これは途中ですよというのもとりあえずそこで勉強になると思う。

消防庁的に考えると、もたもたしていると来ちゃったら大変じゃないかということがあるのかもしれないが、基準まで考えるのかなあというところがちょっと…。あまり拙

速なものを出されるよりは完成度の高いものにしたいなど、せっかくであれば、というふうに思う。できるというのであれば、早いほどいいのは間違いないが。

○ 座長が言われたように、明日起こって一番困るのは具体的な量よりもどういう資源がこういった機能拠点となり得る可能性があるのかとか、あるいは実際そういうところと協定を結んでいる例、具体的には学校とかいろんな公共施設とか、あるいは場合によっては避難者を大量に受け入れるような民間の宿泊施設などもある。災害が起きた場所の近くにそういう資源があって、しかも拠点として今後協定締結とかこういう機能を備えていて候補に挙がりそうなものの例示とか、そういうものも、すぐ起きたら、あわせて第一段として出していけば、詳細な数値シミュレーションは、実際出した後の検証みたいなものでもいいのかも知れないとも思う。

○ 仮のものとして数字があると思うが、多分精密にある種の被害想定をしてどこからどういう部隊、全体でどのくらいの部隊がこういう時間軸で入ってきて、それがどこまで行ってさらにどこまで進んでみたいなことを具体的に考えてみて、それはコンピューターに入れればできるっていうものじゃなくてちゃんと考えていかなければいけない。その結果として必要ないろんな資源がどうやって調達できるのかというようなことを、順番に考えていかなければいけない話。だから、多分最初にやったいろんな原単位のようなものも、やってみると違ってくるはず。静岡でやればこうなるが三重でやるとこうなるというようなものだろうと思う。

いくつかやってみて、全体を平均するとこんな感じかなと。それは大規模な災害、超大規模な災害の場合はこれくらいだが、それほどでもない大規模なものについてはこのくらいだとか、いろんなことが、今までずいぶんやっておられるけどそれを整理しなければいけないし直していかなければいけないから、作業量としてはなかなか大変な作業量になりそうだなと思う。

それを、エイヤってまとめてしまうと、ちょっともったいないなど、せっかくこれをやるので…、というふうに思う。

報告書を出さなければいけない時間と内容を考えながら、よく考えていただきたいと思う。いいものを早く出していただくのはもちろんだが、なかなかやれることとやれないことがありそうな気がする。

(6) 調査報告書の構成

○ 7章の今後の話だが、規格の標準化のところ、備蓄しておく車両・資機材の規格というのは、これは各県で備蓄する考え方でいいのか。先ほどの資料5ではこういったことは書いてなかったがどうか。

○ JDRでやっている、成田にある、あれはすごいメンテをやっている。1年置いたら使えない。それを常に稼働させてくれたり使ってくれる人がいなければ、エンジンはかからないし、おそらく絵に描いた餅になってしまうと思う。

規格の標準化というのは、例えば65ミリのネジ式と町野式の違いは今ほとんど統一されているし、エンジンカッターもラビットだろうがなんだろうが全然平気である。あまりこだわると、逆に変になってしまう。

もし備蓄を考えているなら、航空部隊が運べるパッケージ型で各消防本部に普段から使わせておけばいい。それでないと、その特性を最大限生かせないし、置いておいたものは信頼性がないから本当にもったいないと思う。

- 地元の消防本部が全部メンテをやらされる。実際成田に東消も行くが、これは大変な負担である。
- この中のどこかに緊急消防援助隊員憲章のようなものを入れてほしい。
きわめて精神論的だが、3.11に被災地に入って感たことは、過酷な環境における緊急消防援助隊の消防職員として、自己完結に徹するんだ、技術は高めておくんだ、我慢して耐えるんだというようなことを隊員憲章のように、載せてもらおうと、全国統一的に、行く人間というのはこういう姿勢で行くんだということを示すことが極めて重要かと思う。
- 資料7の第3節、種類のところだが、言葉だけ気になる。「相互の異同」というのは異なるということをはっきり分けてしまうことになる。同じところもあるということだと思うが、果たして本来そうなのか。違いを説明するというよりむしろ、それぞれ機能があるが、それぞれ容量があるが、基本的にはみな防災拠点。関連性とかそういう表現にしていだけないか、ちょっと意味が変わってくるが…。異同というのはどうかなという気がする。
我々は緊急消防援助隊のことを考えているが、最終的にはほかのところにも関係するし…。もう少し表現を変えてもらったらどうかなと思う。
- なかなか除染というのは考えているだけで気が付かない。
- 通常の災害でも臭いとか汚物とかいうのは精神的にダメージが大きい。
欧米ではこの点をものすごくケアするシステムができています。日本も、はっと気づいたのだから、国内でもそれに倣っていくのが消防職員をカバーする点では大事かと思う。
- 除染の問題は、東日本大震災の前ではそれほどでもなかったのか。
- あったと思う。国際救助隊でいったプーケットでは大変な状況だった。遺体収容袋から液体が流れ、その液体は体液。その中で我々は食事もしなきゃいけない、臭いの付いた中で寝なきゃいけない。3.11が夏場であつたら当然同じ状況だったと思う。
9月ごろ現地を訪れた時は臭いとハエがすごかった。
- 3月といえども死臭は相当すごかった。ヘドロと重油、海水、生活雑排水が折り重なっている。もちろん糞尿も。そういう中での作業だから、三重県の保健福祉部の職員は隣接県から消毒液を取り寄せて、朝晩…。自衛隊は独自で消毒液をもっているが、消防隊は消毒液まで持っているのは少なかった。まして医療機関が使うようなゴム手袋などもっていないから。

○ 途中で気がついて、二次派遣隊から救急隊用の感染防護衣を何千着と使わせてもらった。本当に必要である。ディスポの手袋も本当は持って行かなければいけないと思う。二次派遣、三次派遣の時に持ってこさせている。

○ ISO で救助服の基準作りをやっていて、欧米から、オーストラリアからの提案では、手袋は防水でなければならないと。日本は、防水を全部やると細かい作業ができないから両方やってくれというふうに出しているが、今話を聞くとマットにしないはずいのではないかという気がした。

欧米の ISO の手袋はグローブのようなもので、あれでは何もできない。我々は熱を感じないと危ない。だから欧米の、きわめて合理的で、分厚く丈夫でやけどをしないのだと、多分日本の消防にはマッチしない。オーバーミトンのようなものであればいい。